

異言語教育と言語文化（その5）

— 英語教育におけるポピュラー・カルチャー導入の論理とその有用性 —

故・上野義和
森山智浩

〈Summary〉

This is Part 5 of the serial paper about the way to teach foreign languages at higher education in Japan, from multidisciplinary viewpoints of Cognitive Linguistics, Historical Semantics, Sociolinguistics and so on. In the rapid progress of globalization under which a lot of people, objects and information freely circulate, we cannot achieve a better relationship with foreign countries without enjoying their language culture and looking into our identity. Therefore, this series is especially upon what important role “Language-Culture education” plays for the foster of internationally competent human resources. Then, the purpose of this paper is to represent that there could be no other efficient and effective teaching way than for second language learners to enjoy the target language culture and look into their identity logically and systematically in terms of “popular culture.”

1. FDと言語文化教育

本シリーズでは、これまで、我が国のFD下における語学教育のあり方を模索し、言語側面から見た脳科学の研究成果を導入・活用して展開される言語文化教育の重要性を問うてきた。ここでもう一度、教育の根本的理念に目を向けると、教育とは「国家の維持・繁栄」に寄与する人材を育成することに主眼を置かなければならないことは言を俟たない。学校とは社会制度の1つである。社会制度は当該社会の維持・発展を目的として構成される。したがって、学校での教育は社会の維持と発展を目指して行われ、大学もその例外ではない。例えば、教育基本法第2章第7条において「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」と定められている。理念上、大学は「学術の中心」であり、「高い教養と専門的能力を培う」場所であり、「社会の発展に寄与する」ことが求められている。

かたや、グローバリゼーションを完成させ、国際競争を勝ち抜くだけの能力を身につけた人材は国外へ出ていくことも予想される。これは「個人の自由」と言い換えてもよい。国家から優秀な人材が国外へと流れることを促進するだけの教育であっては、先に述べた「国家の維持・繁栄」という基本理念に矛盾し、国家の衰退にもつながりかねない。したがって、国家の維持・繁栄と人材の流出とのギャップを埋める教育研究を進めることは不可避であり、高等教育における

言語教育分野では、来るべく多文化社会において多様な価値を相互理解・交換し、日本国の文化価値を世界に発信して国益をもたらすだけの人材の育成が急務となる。そして、その一端は「言語文化教育」が担えるものとして本シリーズを展開してきた。その詳細として、以下(1)－(3)が挙げられる。

- (1) 「グローバル化時代に生きる新しい世代には、地球社会を担う責任ある個人としての自覚の下に、学際的・複合的視点に立って自ら課題を探求し、論理的に物事をとらえ、自らの主張を的確に表現しつつ行動していくことができる能力が必要とされる。さらに、その根底には、深く広い生命観や人生観の形成、自らの行為及びその結果に対する深い倫理的判断と高い責任感を持って行動する成熟度が求められる」と大学審議会「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」（2000年、答申）において述べられている。

ここには、「学生の『自律』を促進させる」という意図が見える。すなわち「学生の自由の促進」についてである。しかしながら、「学生の立場に立って、入学してくる学生の多様な履修歴や卒業後の多様な進路を考慮しつつ、学生に高い付加価値を適切に身につけさせる体系的な教育課程の編成に留意することが必要である」・「学習指導・履修指導体制の充実」・「教員の教育能力や実践的能力の重視」・「教育活動に関する大学の自己点検・評価の推進」等々、この改革で謳われているのは学校サイドの改革、すなわち「学生を既存の社会に適応させる」ための方途である。ここに、個性の尊重と社会化とのギャップを埋める“what to teach”に関する教育研究が必要となる。

- (2) 「21世紀初頭における社会状況をどのように展望するかは、様々な変化や要素を考える必要があり一概に言い表すことは難しいが、一層流動的で複雑化した不透明な時代」（1998年、大学審議会「答申」）と述べられている。ここで、文部科学省は今後の世界の予測不能性を理解している。

また、「変化が激しく不透明な時代において『主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力』の育成」（1998年、大学審議会「答申」）が要請されている。すなわち「主体性の強調」についてである。資本主義は或る程度未来を予測しないと生きていけないシステムではあるものの、近年のリーマン・ショックでさえ予測できなかった。この教訓を生かそうとすれば我々は上記の文部科学省の方針に納得せざるを得ない。そうした状況下、大学改革は「国際的な通用性・共通性の向上と国際競争力の強化を目指した改革」（2000年、大学審議会「答申」）と、現在メイン・ストリームである「新自由主義」の下での「競争」が継続するとの予測に基づかざるを得なく、それに向けての大学改革が求められている。すなわち「コンテンツポラリーな状況も見つめざるを得ない改革」についてである。ここに、予測不能性と時代の潮流とのギャップを埋める“what to teach”に関する教育研究が必要となる。

- (3) 「一層流動的で複雑化した不透明な時代」（1998年、大学審議会「答申」）においてはどん

な変化にも対応できる人間を育成しなければならないことは認めざるを得ない。とするならば、「不透明な時代」においては如何なる他者を前にしてもコミュニケーションをやり遂げる能力が必要となる。そのためには、語学教育は単なる記号としての言葉を越えた、「文化」にまで届く教育でなければならない。すなわち「柔軟性と深い知識を与える教育による、主体的に思考・行動ができる人間の育成」についてである。

しかしながら、現状では、「レストランの場所」や「友達の一週間の予定」などの尋ね方や定型トピックに対するスピーチ方法を教えるようなテキストをもとに最前線の教育が組み立てられている。これは、予測できる状況や現状にしか対応できない人間の育成と言い換えられるかもしれない。ここに、世界の多様性と硬直した知識を持つ人材育成とのギャップを埋める“what to teach”に関する教育研究が必要となる。

このような理念の下、本シリーズの「その1」および「その2」では「言語文化」の明確な定義づけを行い、「その3」ではESPの観点から言語文化教育が導入される意義を、さらに「その4」では、自戒の念を込めながら、認知言語学の観点から言語文化教育を実践するための我々の立ち位置を問うてきた。また、全稿を通して概念的見地から種々の異言語比較・対照も交えたのは、多文化主義への相互理解が日本の文化価値を世界に発信し国益をもたらす人材育成につながるばかりでなく、本学の建学精神でもある“Pax Munde Per Linguas”（言語を通して世界の平和を）に相通ずるとする信念によるものである。こうした理念・信念は、次の(4)からも支えられることになる。

- (4) 日本におけるバイリンガル教育で本当に考えられなくてはならない問題は、英会話の授業に代表される欧米文化偏向の国際理解教育というよりは、本当はむしろ、在日朝鮮人に関わる問題であり、アイヌ人に関わる問題であり、沖縄に関わる問題であり、流入する外国人労働者に関わる問題であるということがわかるだろう。国際語としての英語をどう身につけるかという問題も、実はこれらの問題の延長線上で、共同体のなかで異文化をどう共存させることが可能であるのかという視点から考えられて初めて意味をなすものである。つまり、多数の異なる言語を話す人々が共存していこうとする場合、どの言語を用いるべきかという文脈の中で、常に批判的な眼を伴って再考していかなければならない問題である。

— 河合靖（1999: 90）

以上、本稿のシリーズの流れとその根底に存在する理念・信念を再確認したが、ここで問題となるのが、上記(1)－(3)の必要条件を満たす言語文化教育の実践には如何なる「教育的視点」が導入されるべきか、ということである。まず、対象となるのが日本人学習者であるならば、彼らが国外で活躍する時代を迎えたとしても常に「日本人」としてのアイデンティティと共存していく（もしくはしていかなければならない）必要があること、さらにその前提として、自身の母語

との異同を参照する必要があることを考慮しなければならない¹⁾。その一方で、新自由主義下におけるグローバル社会での存在意義にも目を向けるのであれば、科学技術面ばかりでなく歴史・慣習・宗教などに関する日本特有の文化的価値にも教育的視点を置かざるを得ない²⁾。以上のことを鑑み、本稿では、海外でもその人気が止まる所を知らない日本のポピュラー・カルチャーの中でも特に多大な功績を残したとされる映画『千と千尋の神隠し』（2001）を映像教材の一例として採り上げ、認知言語学的視座における英語のメカニズムも学習範囲に据えながら、ポップカルチャーの活用が如何に言語文化教育のさらなる発展に寄与するかについての可能性を探る。

2. 映画『千と千尋の神隠し』を導入する言語文化教育の実践場面

2.1. 導入意義

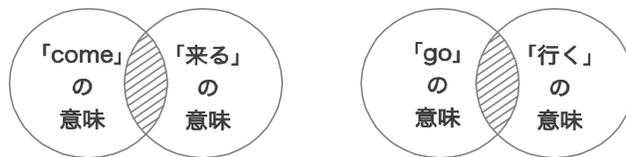
国内累計コミック発行部数が三億部（72巻時点）を突破した『ONE PIECE（ワンピース）』（cf. 毎日新聞デジタル 2013年10月31日付）をはじめ、日本のアニメ・カルチャーが世界を席卷している事実には改めて触れる必要はないであろう。筆者の一人（森山智浩）が計23回に渡って行ってきたルーマニア国における招待講演会（2014年3月時点）実施後の国際交流会においても、現地の大学生たちからは『NARUTO — ナルト —』や『犬夜叉』など日本の様々なアニメに関する話題が飛び交うほどであった³⁾。しかしながら、多分に大人がアニメを見ない習慣も相まって、それらの多くが非中高年向けであり、日本のように幅広い年齢層に浸透しているとは言い難い。そのような中、株式会社スタジオジブリの作品は異彩を放っており、特に、興行収入304億円、観客動員数2,300万人を越え、日本国内の映画興行成績における歴代最高の記録を打ち立てた『千と千尋の神隠し』は、第52回ベルリン国際映画祭金熊賞や第75回アカデミー長編アニメ賞など数多くの受賞功績を残し、海外でも非常に高い評価を与えられている。それ故、本作品は、心理学（cf. 山本（2005）、木部（2003））や物語分析（cf. 浅野（2003））、文化学（cf. 高木（2007, 2008））や翻訳論（cf. 山田（2004））など、様々な学術的観点からその分析が進められてきた。一方で、学術的にもそれほどの価値を持つにも拘らず、筆者たちの知る限り、日本語・英語の比較も交えた認知言語学的知見を取り入れながら、同作品を英語教育に活用した、あくまでも体系的な言語文化研究は存在していない。同作品が日本を舞台にし、かつ、数多くの人々を魅了してきた事実を鑑みると、日本の学習者の興味をそそる映像教材にもなり得る。そこで、以下2.2-2.3では、同作品を実際に高等教育における言語文化教育に導入する論理の一案を模索する⁴⁾。その後、第3章ではその有用性についての実証結果を提示する⁵⁾。なお、前者については、まずは同作品を対象学習者各自が視聴し、各場面の状況設定を理解していることが前提となる⁶⁾。

2.2. 映画『千と千尋の神隠し』における日本語との異同参照を通した英語表現能力の育成

2.2.1. 語彙面による異同参照

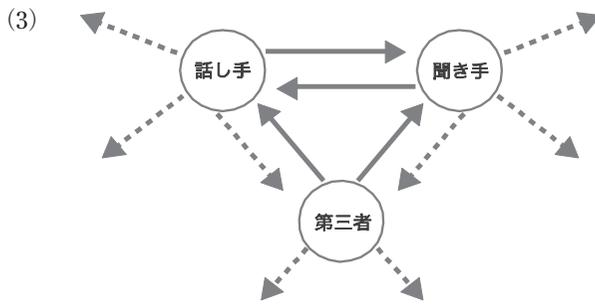
意味論上、外国語単語と日本語単語とは必ずしも一対一の対応関係になるとは限らない。この点について、上野・森山・福森・李 (2006) では、come と go を例に挙げて以下(1)のように記し、続けて、次の(2a-b) 各々の対応関係を例に挙げながら、下図(3)に見る come, go 各々の直示的語用のメカニズムで捉える重要性に言及している⁷⁾。

- (1) Come と go に関して、皆さんは「come = 来る / go = 行く」と覚えていませんか？もしそうなら、それは丸暗記ですから、この瞬間から「英単語 = 日本語訳」という形式を記憶から消し去って下さい。…「それならなぜ辞書では come を「来る」、go を「行く」と記載しているのか？」という疑問についてです。数学では「 $4 = 2 \times 2 / 4 = 3 + 1$ 」のように、イコールの左辺と右辺の値が常に等しくなければなりません、言葉の世界では「左辺 = 右辺」は成立し難いものです。たとえば、辞書では次のようになっていくことが多いことを知って下さい。



ここでは、「come」の意味と「来る」の意味とが、また「go」の意味と「行く」の意味とが、たまたま重なり合う斜線の部分が辞書に記載されているだけのことです。

- (2) a. 母 (=話し手): 「ごはんできたわよ！」 ([あなた] = 聞き手)
 あなた (=話し手): 「すぐ行きま〜す！」 ([母] = 聞き手)
 母: “Dinner’s ready!”
 あなた: “I’m *coming* / **going* right away!”
- b. 〈ニュー・ヨークに住む友人に、あなたが電話している / 手紙を書いている状況〉
 あなた (=話し手): 「この夏にニュー・ヨークに行くつもりです」 ([友人] = 聞き手)
 あなた: “I’m planning to *come* / **go* to New York this summer.”



【※実線 (→) は come, 点線 (---▶) は go を表す】

— 上野・森山・福森・李 (2006: 1-3) (中略・一部修正筆者)

このような「概念」学習を重視した上で、映画『千と千尋の神隠し』を用い、その捉え方の重要性をさらに確認させることができる実践場面の例が以下(4)である⁸⁾。

(4) Chihiro: Granny. 「おばあちゃん」 <01:56:10>⁹⁾

Yubaba: Granny!? 「おばあちゃん!？」

Chihiro: I'm *coming* to you. 「いまそっちへ行きます」

— 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体・下線筆者)

同様に、同作品において学習者の母語である日本語との異同を参照させ、語彙面における概念的捉え方を体感させる学習機会となる例が次の(5) - (13)である¹⁰⁾。

(5) Chihiro's father: Must be *the way in*. 「門みたいだねえ」 <00:03:19>

(6) Kamaji: Take this. A Roasted newt. *Real quality*. <00:29:27>

「これでどうだ? イモリの黒焼き。上もんだぞ」

(7) Zeniba: Oh, dear, seems I *was careless*. 「あらあ、油断したねえ」 <01:24:48>

(8) Haku: I'll *distract them*. Get back across the river. <00:11:32>

「私が時間を稼ぐ。川の向こうへ走れ」

(9) Kamaji: The girl can *handle her*, I'm sure. 「あとは自分でやるだろう」 <00:29:24>

(10) Yubaba: I'll *put you to work*. 「働かせてやる」 <00:39:28>

(11) Lin: So you pulled it off. Huh?! You're so *thick*. I was worried. *Keep your wits*, now. If you need something, ask me, OK? <00:42:11>

「お前、うまくやったなあ。お前とろいから、心配してたんだ。油断するなよ。わかんないことは俺に聞け、なっ?」

(12) Chihiro: Come here. *Behave yourself*, OK? <01:39:16>

「(電車の中で自分の座席の横にカオナシを呼びよせながら) おいで。大人しくして

てね」

- (13) A bathhouse worker (small frog): It's *nothing but sand!* <01:43:43>

「(砂金の魔法がとけて土になってしまったことに驚いて) 土くれだ!」

— 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体・下線筆者)

2.2.2. 反復回避における異同参照

筆者たちの経験上、学習者に英語エッセイなどを書かせると、同一の語句を何度も使用するケースが散見される。これは、日本の中等機関における語学教育の中で何度も指摘されてきたはずであるが、どうもその意識づけが弱かったことに起因するのではないかと考えざるを得ない。そこで、たとえば以下(1) - (2)といった場面を扱う映像資料を用いることで、視覚的に印象づけると同時に、各々「[ゲルマン語由来表現+ラテン語由来表現]/[英語本来語+ドイツ語由来語]」、「文法的技法」などによる反復回避パターンを体感する学習機会とすることができる。

- (1) a. Chihiro: It's just a dream, a dream. *Go away, disappear.* <00:13:38>

「これは夢だ, 夢だ, 消えろ, 消えろ」

- b. Yubaba: As I suspected. Now, *pull!* Now, *heave!* <01:04:01>

「やはり。さあ, 引くんだよ!」

- (2) Chihiro: *It's a dream, it's got to be.* 「夢だ, 絶対夢だ」 <00:13:59>

— 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体・下線筆者)

2.2.3. 「肯定 ↔ 否定」対立による異同参照

2.2.7にて論述する「発想の転換」にも密接に関連するが、肯定的内容をあえて否定的に、また、否定的内容をあえて肯定的に解釈する習慣を身につけさせることで英語表現力のさらなる向上に寄与する場合がある。以下(1) - (12)がその実践場面となる。

〈肯定的(日本語字幕)から否定的(英語訳)への解釈パターン〉

- (1) Chihiro's mother: *It doesn't look so bad.* 「結構綺麗な学校じゃない」 <00:00:38>

- (2) Chihiro's father: *No need to be scared.* 「なーんだ, 怖がりだなあ, 千尋は」 <00:03:52>

- (3) Chihiro: *That can't be...* 「嘘だ…」 <00:13:22>

- (4) Chihiro: *I hope Dad hasn't gotten too fat.* <01:02:29>

「お父さんあんまり太ってたらやだなあ」

- (5) A bathhouse worker: *Don't just stand there...* 「何をしておる, はよどけ…」 <01:15:21>

- (6) Big baby: *I'm not afraid of blood.* 「血なんか平気だぞ」 <01:22:25>

- (7) Kamaji: *Can't beat the power of love...* 「いいなあ, 愛の力だなあ…」 <01:41:55>

- (8) Yubaba: *This gold hardly covers the damage.* That fool, Sen! She just cost me a fortune.

<01:41:59>

「これっばかしの金 (きん) でどう埋め合わせするのさ。千の馬鹿がせっかくのもう
けをふいにしちまって」

〈否定的 (日本語字幕) から肯定的 (英語訳) への解釈パタン〉

(9) a. Chihiro's mother: *You will make me trip*, Chihiro, clinging like that. <00:04:39>

「千尋, そんなにくつつかないで, 歩きにくいわ」

b. Chihiro's mother: *You'll make me trip*, Chihiro, clinging like that. <01:59:38>

「千尋, そんなにくつつかないでよ. 歩きにくいわ」

(10) Chihiro's father: *I knew it*. 「やっぱり間違いないな」 <00:06:10>

(11) a. Chihiro: *Where is everybody?* 「誰もいないねえ」 <00:07:59>

b. Chihiro: *Where is everybody?* 「誰もいない?」 <01:10:17>

(12) Haku: Go ahead, eat, *you must be hungry*. <00:49:20>

「お食べ, ごはんを食べてなかったろ?」

— 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体・下線筆者)

2.2.4. 日本語特有表現を通じた異同参照

ケニア出身の環境保護活動家であり, 2004年に環境分野で初めてノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイ (Wangari Muta Maathai, 2011年9月25日逝去)氏が日本語表現『勿体ない (MOTTAINAI)』を世界共通の言葉として広める活動に従事していたことは記憶に新しい。「勿体ない」は仏教用語に由来し, 和製漢語「勿体」と否定語「無し」との合成語である。つまり, 意味論的には, 「勿体」が持つ「威厳; 重々しさ」の意味が否定されることにより, 英語で言う [not dignified → not reasonable → not deserved → worthy of a better cause] という意味変化を起こしたと考えられる。そして, 次の(1)に示されるように, 英語では「勿体ない」が waste や wasteful などを用いて翻訳される場合も少なくない。

(1) A bathhouse worker: Never. *What a waste!* 「まさか, そんなもったいない」 <01:01:31>

— 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体・下線筆者)

しかしながら, 筆者たちが知る限り, 「勿体ない」が持つ「他者・他物への敬意」, さらには「消費削減・再使用・再生利用」の概念をも表示する単一語は他言語 (少なくとも英語) には存在していない。その意味では, 日本語特有の表現であると言える。そして, そうした日本語特有の表現の中でも, 設定状況によって英訳への解釈が多様になるものも多数存在している。次の(2) – (8)の実践場面例の活用は, 日本語を母語とする学習者に, 自身の用いる日常表現の中にそうした語句が存在することも意識づける学習機会となる。

- (2) Chihiro's father: *It'll be great, once we get used to it.* <00:00:29>
「住んで都にするしかないさ」
- (3) Haku: Can you find your way back? 「独りで戻れるね?」 <00:50:23>
Chihiro: Yes, Haku, thank you. *I'll work very hard.*
「うん、ありがとう、ハク。私、がんばるね」
- (4) A bathhouse worker: Orders from the top. *Better give it your all.* <00:52:39>
「上役からの命令だ。骨を惜しむなよ」
- (5) A bathhouse worker: *Please forgive her manners.* <01:16:11>
「(Chihiro の行為に対して) とんだ御無礼を致しました」
- (6) Chihiro: Oh... *I knew it was Haku!* 「あー、やっぱりハクだ!」 <01:27:56>
- (7) Zeniba: My sister and I are *two halves of a whole*, but we don't really get along. You've seen what bad taste she has. <01:49:30>
「あたしたち二人で一人前なのに気が合わなくてねえ。ほら、あの人、ハイカラではないでしょ」
- (8) Yubaba: I won't be a minute, Baby. 「坊、すぐに終わるからね」¹¹⁾ <01:56:42>
Chihiro: *Don't worry.* 「(Big baby に向かって) 大丈夫よ」
— 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体・下線筆者)

2.2.5. 主体の入れ替えによる異同参照

2.2.7 にて論述する「発想の転換」にも密接に関連するが、主体を入れ替えて解釈する習慣を身につけさせることで英語表現力のさらなる向上に寄与する場合もある。以下(1) - (16)がその実践場面例となるが、日本語字幕の当該内容を念頭に置きながらも、ここでは対象英語表現内で「主体」となる最初の語句(以下では斜体部分)は提示しておき、それに続く英語表現を考えさせながら、意味論的・統語論的にその組み立てを指導することが肝要となる((6)については命令形で始まることのみ指示)。

- (1) Chihiro: *What's his problem?* 「何よ、あいつ」 <00:11:49>
- (2) Chihiro: *I can see through!* 「(肌が)透けてる!」 <00:13:54>
- (3) Haku: *It'll be hard work, but it will give you a chance.* <00:19:44>
「辛くても、耐えて機会を待つんだよ」
- (4) Chihiro: Um, *Haku sent me here.* Please let me work here. <00:24:52>
「あの一、ハクという人に言われてここに来ました。ここで働かせて下さい」
- (5) Lin: *You wanna lose your nose?* <00:30:55>
「(エレベーターから Chihiro が顔を出しているのに対して) 鼻がなくなるよ」
- (6) Yubaba: *Forget it.* 「(Chihiro が「雇って下さい」と言った後) お断りだね」 <00:37:59>

- (7) Yubaba: *I'll be right there.* 「(泣きやまない赤子に対して) ちょっと待ちなさい」
 <00:38:46>
- (8) Chihiro: *I'm dizzy.* 「足がふらふらする」 <00:42:24>
- (9) Lin: *That (is) the best you can do?*¹²⁾ 「千, もっと力入んないの?」 <00:52:31>
- (10) Chihiro: *I'm a human. Maybe you never saw one before.* <01:20:56>
 「私, 人間よ。この世界じゃ, ちょっと珍しいかもしれないけど」
- (11) Zeniba: *There, that gives you a little more freedom.* <01:23:10>
 「その方が少しは動きやすいだろ」
- (12) Lin: *(Are) You serious?!*¹³⁾ 「えーっ, 本当かよ?!」 <01:30:15>
- (13) A bathhouse worker: *Yubaba, it's Sen.* 「ユババ様, 千です」 <01:31:51>
 Yubaba: *Where were you!* 「遅い!」
- (14) Yubaba: *What took you so long! This is a complete disaster!* <01:32:02>
 「何をそんなにぐずぐずしてたんだい! このままじゃ大損だ!」
- (15) No Face: *You'll pay for this!* 「許せん!」 <01:35:54>
- (16) Lin: *No Face, if you so much as touch that girl, you'll pay for it!* <01:37:38>
 「カオナシー, 千に何かしたら許さないからな!」

— 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体筆者)

2.2.6. 前置詞および前置詞的副詞を通した異同参照

英語は語順言語である一方, 日本語は(程度の差はあれども)その制約が弱い。互いに属する語族が異なるのだから, 必然的に, 日本語母語話者に英語の句・文作成に対する統語構造の指導を行う際にはそのメカニズムの相違について注意を払わなければならない。さらに前者を前置詞言語, 後者を助詞言語と規定した場合, 各々の総数が異なるのだから, 日本の学習者にとって, 各前置詞(もしくは前置詞的副詞)との「一対一ではない概念的異同」を参照することなしで英語表現力のさらなる向上は能わないと考えられる。数例ではあるものの, そうした「気づき」を学習者に起こさせる実践場面例として以下(1) - (3)を挙げる¹⁴⁾。

- (1) a. Haku: *Meet me at the bridge. I'll show you your mother and father.* <00:44:55>
 「橋のところにおいで。お父さんとお母さんに合わせてあげる」
- b. Yubaba: *Where did you hide my baby?!* 「私の坊をどこにやった?!」 <01:44:17>
 Haku: *He's with Zeniba.* 「ゼニバのところです」
- (2) a. A bath house worker: *Off you go!* 「はよ行け」 <00:41:57>
- b. Zeniba: *I'm sure you can manage everything.* <01:52:26>
 「大丈夫, あんたならやり遂げるよ」
- Chihiro: *My real name is Chihiro.* 「私の本当の名前は千尋っていうんです」

Zeniba: Chihiro... what a nice name. Take good care of it, it's yours.

「千尋…いい名だね。自分の名前を大事にね」

Chihiro: I will! 「はい！」

Zeniba: *Off you go.* 「さ、お行き」

c. Chihiro's father: Chihiro, we're *off*. 「千尋, 行くよ」 <02:00:20>

d. Yubaba: Now, *in* you go. Call you if you need us. <01:32:20>

「(千に対して) さあ, 行きな。(客のカオナシに対して) ごゆっくり」

e. Chihiro's mother. You can't just run off just like that. <01:59:06>

「ダメじゃない, 急にいなくなっちゃ。」

Chihiro's father: *Away we go.* 「行くよ」

(3) Chihiro's father: Hurry *along*, Chihiro. 「千尋, 早くおいで」 <01:59:27>

— 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体・下線筆者)

2.2.7. 発想の転換を通じた異同参照

上野 (1993: 3, 43, 47) では, 以下(1) – (3)のような英訳ライティング問題を挙げ, 日本語母語話者の英語表現能力を育成する際, 「発想の転換」が如何に重要かが示されている。

- (1) 彼は私の命の恩人だ。
- (2) 幼児はよく靴を逆にはく。
- (3) リンカーンはアメリカの何代目の大統領かときかかれてもたいていの人には正しく答えられるだろうし, ジョージ・ワシントンの場合ならそれこそだれでも知っているだろう。が, 二代目は? ときかれて答えられる人は, よほどの歴史通だ。

— 上野 (1993: 3, 43, 47)

上記(1) – (2)はそれぞれ「品詞における発想の転換」, 「語彙概念における発想の転換」が要求されるのに加え, (3)では(その前後のコンテキストなくして)「何代目」そのものに相当する英語語句が存在せず, 「文脈自体を活用する発想の転換」が必要とされている¹⁵⁾。これら「発想の転換」でもって英語表現能力育成を図ることができる実践場面例として, 以下(4) – (17)を挙げる。

〈品詞における発想の転換〉

(4) Kamaji: *Finish* what you start. 「手え出すなら, しまいまでやれ!」 <00:27:05>

(5) Lin: Not a chance. And *risk my life*? 「やなこった。あたいが殺されちまうよ」

<00:29:25>

(6) Zeniba: *Nothing that happens* is ever forgotten even if you can't remember it. <01:50:05>

「一度あったことは忘れないものさ。思い出せないものだけで」

- (7) Zeniba: There we are. Use it *tie back your hair*. 「さ、できたよ。髪留めにお使い」

<01:50:57>

Chihiro: It's so pretty. 「うわあ、綺麗」

Zeniba: *It'll protect you*. I made it from the thread they span.

「お守り。みんなで紡いだ糸を編み込んであるからね」

〈語彙概念における発想の転換〉

- (8) Chihiro's mother: This really is *the middle of nowhere*. 「やっぱり田舎ね」 <00:00:23>

- (9) A bathhouse worker: *No point in there*. Back to work! <00:54:24>

「いつまで待っても同じだ。戻れ、戻れ」

- (10) Chihiro: You *can't help me* with what I want. <01:33:20>

「私が欲しいものはあなたには絶対に出せない」

- (11) Zeniba: What good timing. We've got another guest, *let him in*. <01:51:23>

「いい時に来たね。お客さんだよ。出ておくれ」

Chihiro: Sure. 「はい」

〈文脈自体を活用する発想の転換〉

- (12) Chihiro's mother: You *are going to kill us*. 「あなた、いい加減にして」 <00:02:58>

- (13) Lin: *We're almost there*. 「(エレベーターで) もう一回乗り継ぐからね」 <00:31:21>

- (14) Yubaba: Be still. Our guest is still with us. Sen, you're *in our guest's way*. Get out and open the door. <01:05:29>

「静かにおし。お客様がまだおいでなんだよ。千、お客様の邪魔だ。そこを降りな」

- (15) Chihiro: I didn't see Haku. 「ハク、いなかったね」 <01:06:45>

Lin: *Not Haku again*. 「またハクかよ」

- (16) Chihiro: There's a town. Looks like the ocean... 「街がある。海みたい…」 <01:07:28>

Lin: *What did you expect after all that rain?*

「当たり前じゃん、雨が降りゃ海ぐらいできるよ」

- (17) Yubaba: *Out of my way!* Not on my premises. <01:34:48>

「みんな、おどき! お客様とも許せぬ!」

— 映画『千と千尋の神隠し』（2001）（イタリック体・下線筆者）

2.3. 映画『千と千尋の神隠し』における認知メカニズムの理解促進

第1章で論じたように、来るべく多文化社会において多様な価値を相互理解・交換し、日本国の文化価値を世界に発信して国益をもたらすだけの人材を育成するためには、学習対象言語の母語話者の「認識」を見つめ、さらに自身のアイデンティティにまで理解を及ぼすような言語文化教育が必要となる。そこで、以下では、認知言語学的知見を中心に、引き続き、映画『千と千尋の神隠し』における英語表現を対象にした同教育の実践場面例を提示する¹⁶⁾。

2.3.1. フレームの活用

「フレーム (FRAME)」とは、ある事物・事象を捉える際に機能する背景知識の枠組みを指す。たとえば、以下(1)は発話者の持つ社会情勢の枠組みが異なるが故に会話がかみ合わない事例である一方、次の(2)は「百科事典的知識 (ENCYCLOPEDIAIC KNOWLEDGE)」と呼ばれる背景知識が機能することによって字義通り以上の意味が表示される事例である。

(1) Young Doc: *No wonder this circuit failed. It says, "Made in Japan."* <00:12:29>

Marty: What do you mean, Doc? *All the best stuff is made in Japan.*¹⁷⁾

— 映画 *Back to the Future Part III* (1990) (イタリック体筆者)

(2) Demo: I'm a rambling man. I'm a *tumbleweed*. I'm a seeker of truth. And one truth I've learned, a child is a parent's greatest joy. <00:06:45>

— 映画 *Failure to Launch* (2006) (イタリック体筆者)

「フレーム」認識は『千と千尋の神隠し』にも生きており、そのタイトル自体でさえ「神道」という日本古来のフレームを学ぶ機会となる。これは、本作の英語タイトル *Spirited Away* と比較させ、それが「神隠し」の厳密な意を表すことができない異同に着目させることでさらなる学習効果が期待される¹⁸⁾。なお、こうした「超越的視点」への理解をさらに深める学習機会となる例が次の実践場面であり、(3)–(6)には神道フレームが、また、(7)にはキリスト教のフレームが反映されている。

(3) Yubaba: It's a bath house, where 8 *million gods* can rest their weary bones. <00:36:32>

(4) Haku: Yubaba *rules others by stealing their names*. <00:48:54>

(5) Yubaba: Something's fishy. Didn't seem like a *Stink God*, to me.¹⁹⁾ <00:58:20>

(6) Haku: I can't go any farther. Go back the way you came, Chihiro. But *don't ever look back not until you're out of the tunnel*. <01:58:09>

(7) Haku: *In the name of the wind and the water within thee... Unbind her.*²⁰⁾ <00:16:24>

— 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体筆者)

そして、以下(8)–(9)を実践場面例として用いることで、別の角度から日本特有のフレームを考えさせることができる。前者では初めて迎える客であっても“back”の空間関係づけを用いることで「おもてなし」のフレームが、後者では酷い仕打ちを受けた相手であっても心を尽くす「一宿一飯」のフレームが示されている。まさに、日本のアイデンティティを見つめる学習機会となる。

(8) Maids: Welcome *back!* We missed you! <00:18:00>

- (9) Yubaba: Go! You win. Just get out of here. <01:57:45>

Chihiro: [Taking a bow] *Thank you for everything.*

— 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体筆者)

なお、「百科事典的知識」の活用については、下記(10) – (12)がその実践場面例となる。

- (10) Lin: *Chow time.* <00:28:36>

- (11) Yubaba: You're *making a racket.* Keep it down. <00:35:48>

- (12) Kamaji: *Gross, gross, Sen! Totally gross. Gross out!* <01:27:37>

— 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体筆者)

2.3.2. 構造のメタファーの活用

「構造のメタファー (CONSTRUCTIONAL METAPHOR)」とは、抽象的事物・事象の特徴的一側面を、具象的事物・事象に基づく経験を利用して構造化し、理解の領域に手繰り寄せる一連の変換プロセスを指す。たとえば、以下(1)のような実例を利用することで、学習者は UNDERSTANDING IS SEEING という比喩のフィルターでもって、「理解」という抽象領域が「視覚経験」を通して構造化されていることをまさに「見る；判る」ことができる。

- (1) Prescott: Well, I'm inviting her out to the party this weekend, and we're gonna spend a little time together ... which is why I need you to keep your Aunt Vera occupied as much as possible. *Get the picture?* <01:19:40>

Brantley: Yeah, *wide-screen.*

— 映画 *The Secret of My Success* (1987) (イタリック体筆者)

このような「構造のメタファー」を通じた認識を活用すれば、その範疇に収まる種々の表現を体系的に習得することも可能となる。たとえば、UNDERSTANDING IS SEEING メタファーを通じた実践場面例が次の(2) – (3)である。

- (2) Haku: You *see?* Now come. <00:15:37>

- (3) Yubaba: We have an intruder. <00:56:00>

A bathhouse worker: It is human?

Yubaba: You *figure it out.* Haku's out today.

— 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体筆者)

なお、同作品にはその他の様々な構造のメタファーも活用されている。その一例を以下に記す。

- (4) 〈集中することは一つを見続けることである〉

Yubaba: But one *peep out of* you about anything, and I'll turn you right into a piglet!

<00:39:30>

- (5) 〈活動し始めることは立姿勢へと移行し、活動をしないことは横臥姿勢をとることである〉

Maid: On the big tub, Lin? <00:53:39>

Lin: *Lay off me.*

— 映画『千と千尋の神隠し』（2001）（イタリック体筆者）

2.3.3. 方向づけのメタファーの活用

「方向づけのメタファー（ORIENTATIONAL METAPHOR）」とは、人間が本来的に持つ「上／下」, 「内／外」, 「前／後」といった方向性を他の事象・事物（抽象的事象・事物も含む）に投射する一連の認知プロセスを指す。たとえば、以下(1)－(2)のような実例を学習者に示すことで、それぞれ「実行できることは近接している（PERFORMABLE IS ADJACENT）↔ 実行できないことは離れている（UNPERFORMABLE IS REMOTE）」, 「感情的は上（EMOTIONAL IS UP）↔ 理性的は下（RATIONAL IS DOWN）」という空間関係づけを理解させることができる。次の(3a－b)に示されるように、後者については同作品でも観察される。

- (1) Amy: You say that like that's something she's *remotely* capable of. Why do you let her do this to you? <00:11:57>

— 映画 *In Her Shoes* (2005) (イタリック体筆者)

- (2) Ishmael: What else is there? Emotions? Facts you can cling to. *Emotions just float away.*²¹⁾ <00:45:48>

— 映画 *Snow Falling on Cedars* (1999) (イタリック体筆者)

- (3) a. Haku: When thing's quiet *down*, go out by the back gate. <00:19:09>

b. A bathhouse worker: Quiet! Quiet *down*! <01:16:05>

— 映画『千と千尋の神隠し』（2001）（イタリック体筆者）

こうした「方向づけのメタファー」の活用は、そのメカニズムを知ることで、特に「不変化詞」との意味論的共起関係を学習させる際に役立つ。以下(4)－(5)にその実践場面例を提示する。

- (4) 〈元の状態に移行することは後方に移動することである〉

a. Chihiro: I'm *back* again. <00:15:36>

b. Lin: Mommy, Daddy, the River God gave me this cake. I'm sure if you eat this, you'll turn *back* into people. <01:09:43>

- c. Yubaba: Go *back* to sleep now. Good baby. <01:20:13>
- (5) 〈空間の閉鎖は上方向である, 出現は上方向である〉²²⁾
- a. Yubaba: Shut *up*! <00:37:37>
- b. A bathhouse worker: Oh... A fragrant bath coming *up*. Relax and enjoy... <00:55:35>
— 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体筆者)

2.3.4. 存在のメタファーの活用

「存在のメタファー (ONTOLOGICAL METAPHOR)」とは、「出来事, 活動, 感情, 考え」などの抽象的事象・事物があたかも物理的に存在しているかのように認識される一連の認知プロセスを指す。また, 本来明確な物理的境界線が存在していない事象・事物にも「内/外」の空間方向性を投射し, 認識上の領域を設ける知的活動もここに含まれる。以下(1) - (2)がその実例である。

- (1) Simon: This has nothing to do with him. This is about you and me. You're not talking to me. You're not telling me *what's going on inside you*. <01:36:31>
— 映画 *In Her Shoes* (2005) (イタリック体筆者)
- (2) Bren: Somebody else is gonna find a precious blessing from Jesus *in this garbage dump of a situation*. <00:26:34>
— 映画 *Juno* (2007) (イタリック体筆者)

こうした「存在のメタファー」の機能を理解し, 活用することによって, 構造化された事象・事物を識別・数量化し, 論理立てて表現することが可能となる。以下(3) - (13)がその実践場面例である。

- (3) Kamaji: If they don't work, *the spell wears off*. <00:28:16>
- (4) Lin: *Cut it out*. Where's your bowl? <00:28:42>
- (5) Lin: I keep telling you to *leave it out*. <00:28:44>
- (6) Lin: A human! You're *in trouble*! <00:29:05>
- (7) Lin: He's *looking out* for you. <00:30:13>
- (8) Chihiro: Are there two Hakus here? <00:42:30>
Lin: Two?! Of him? I sure hope not. Too big. He's Yubaba's henchman. *Watch out* for him.
- (9) Chihiro: Are they sick or hurt? <00:48:01>
Haku: No, they are too much. *Sleeping it off*.
- (10) Haku: I *put a spell on it* to give you back your strength, eat it. <00:49:26>
- (11) Maid: *Lights out*, Lin. <01:07:00>

(12) No Face: *Wipe that smile off your face.* I saw that look. <01:16:19>

(13) Zeniba: There, *that gives you a little more freedom.* <01:23:10>

— 映画『千と千尋の神隠し』（2001）（イタリック体筆者）

2.3.5. メトニミーの活用

「メトニミー (METONYMY)」とは、「部分と全体 (THE-PART FOR THE WHOLE)」もしくは「近接性 (PROXIMITY)」の関係により、ある事柄をそれとは異なる領域の事柄で指し示す技法を指す。そうした指示関係は、たとえば以下(1)のような実例を挙げることによって、より円滑な理解を促すことができる。

(1) Paint-ball player: First one to paint *the skirt* gets a beer. <00:27:47>

— 映画 *Failure to Launch* (2006) (イタリック体筆者)

「メトニミー」の活用は、必然的に、既知の語句でもって指示関係への解釈を深め、その利用表現数を豊かにする学習効果が期待される。次の(2) - (4)がその実践場面例である。

(2) Yubaba: Or maybe you'd like the worst, nastiest job I got, until *you breathe your very last breath?!* <00:38:05>

(3) Yubaba: We're in a fine mess, now. Actually, he's a *No Face*. <01:19:10>

(4) Zeniba: You boys give me *a hand*. <01:50:13>

— 映画『千と千尋の神隠し』（2001）（イタリック体筆者）

2.3.6. 心的走査の活用

「心的走査 (MENTAL SCANNING)」とは、実際に物理的移動がなくとも、ある移動の軌跡を頭の中で辿るような連続走査活動を指す。「心的走査」を活用する学習利点は、移動概念表示語句でもって心的移動を表現する論理を獲得することにある。以下(1) - (2)がその実践場面例である。

(1) Carl Senior: *That fence to that fence and then down to the road.* That's seven acres, isn't it? *Around to the edge of the mountain?* <00:34:08>

— 映画 *Snow Falling on Cedars* (1999) (イタリック体筆者)

(2) Lin: Yubaba lives *up at the top, in the back*. <00:30:31>

— 映画『千と千尋の神隠し』（2001）（イタリック体筆者）

3. 映画『千と千尋の神隠し』を活用した言語文化教育の実証結果

ここでは、2.2-2.3 で見た英語学習論理を学部教育（教養教育）に導入・活用した結果、学習者の満足度が如何なるものであったかを記載する。以下は近畿大学全学共通授業評価アンケートの結果（2011 年度前期・後期各々における 2 クラス分を統合した結果）に基づくものである²³⁾。

- (1) 講座名：ベーシックライティング A・B（受講者数（3 回生）：計 120 名）
期 間：2012 年度 前期・後期，講座担当者：森山 智浩
- (2) 同講座において進められた本稿論述内容に関する学習手法の概略
 - a. 前提として、受講者各自が同作品を視聴し、各場面の状況設定を理解している。
 - b. まず、本稿 2.2.1-2.2.7 各々で論じた英語表現能力育成を目的に、それぞれでとり上げた英語事例に関し、イタリック部分もしくはその前後も含めた表現について、日本語字幕を参考にしながら、穴埋め四択問題や英語ライティング問題などを設定。日本語解釈の問題も付加。なお、英語ライティング問題については当該英語事例とは異なる回答も当然存在するため、適宜、挙手による質問に対して一人ひとりの指導も進める。
 - c. 次に、本稿 2.3.1-2.3.6 各々で論じた英語母語話者の認識メカニズムへの理解およびその活用能力の育成を目的に、それぞれの論理を様々な映画映像教材を用いて学習（主に倉田（編）（2011）を使用）。引き続き、本稿 2.3.1-2.3.6 各々でとり上げた同作品の英語事例に関し、イタリック部分もしくはその前後も含めた表現について如何なるメカニズムが機能しているかをペア・ワークで議論。
 - d. その後、シャドウイングなども含めた発音指導を行い、本稿 2.2.1-2.2.7 および 2.3.1-2.3.6 各々でとり上げた場面をロールプレイによって実演。フィルム・プロダクションを通して自身の言葉にすることが目的。
- (3) 近畿大学全学共通授業評価アンケートの結果
 - a. 設問文：この教員の授業を 10 点法で評価してください（設問 14）。
 - b. 回答：前期：9.5 点，後期：9.6 点（小数点第二位以下は四捨五入）
 - c. 当該アンケート用紙に記載された主要な意見（原文のまま）
 - ・素晴らしい授業でした。使える英語，大学の英語を実感しました。
 - ・ライティングだけでなく，異文化のことや，実用的な英語を教えて下さったし，今までに受けたことのない授業だったので，楽しかったです。
 - ・授業が面白いです。英語は嫌いですが，嫌いでも楽しめる授業でした。
 - ・大変素晴らしい授業でした。日本人の為の英語の授業でした。しっかりと言葉・単語の概念，ネイティブの感覚をご教授頂き，大変良かったです。
 - ・先生独自で準備して下さる映画などの教材が興味深かった。
 - ・分かりやすいし，ただの英語の勉強じゃなくて文化とか色々知れて，とてもよかったです。

もっと英語が好きになった。

- ・今まで英語を教えてもらった先生のなかで1番わかりやすい。最も筋が通っていた。
- ・英語を学ぶことにおいて不明瞭な点を言語学の観点から教えて頂いたので、非常に有益だった。英語の授業をここまでおもしろいと思ったことはない。
- ・すごく素晴らしい授業だと思います。本当に英語を勉強していると実感しました。英語の背景や知識を教えて頂いているので、非常にわかりやすい授業でした。
- ・英語は苦手でしたが、興味が持てる授業でした。これからも頑張りたいです。
- ・ネイティブの考え方など実践的に役立つ英語を教えて頂きました。
- ・他の先生よりとても分かりやすく、今までやってきた嫌な英語とは全然違います。
- ・認知言語学という観点から英語を見ることができ、面白かった。
- ・素晴らしい授業だった。大学に来た意味すら見出せるような授業でした。
- ・すごく授業が理解できるようになるので、一番良かったです。初めて、授業がここまで楽しいものだと思えました。またこの先生の授業を受けたいと思えました。

特に、上記（3b）において、近畿大学法学部における全外国語科目の平均点が前期 8.2 点／後期 8.4 点、全共通教養科目の平均点が前期 7.2 点／後期 7.4 点、全基礎ゼミ（1 年次前期のみ開講）の平均点が 7.9 点、全専門科目の平均点が前期 7.5 点／後期 7.9 点であることも鑑みれば、当該講座の評価は突出しており、新しい言語文化教育への学習者の高い満足度を窺い知ることができる²⁴⁾。

〈Notes〉

- 1) 英語学習者がローマ・アルファベット言語や語順言語を母語とする場合と（日本語母語話者のように）そうでない場合とでは、必然的に、その学習方法は各々に適応させたものでなければならぬ。このことはたとえば前者向けに開発された海外のテキストを後者にそのまま利用しても十分な学習効果が得難く、さらに、日本語との異同を参照することなくして十分な理解も得難いことを意味する。
- 2) 「歴史」・「慣習」・「宗教」の三つの教育的視点が、学習言語の母語話者が持つ認識世界への理解に不可欠であり、かつ、学習者の母語との概念的異同を参照する上で大きな役割を果たすことについて、詳しくは Moriyama (2012) 参照。
- 3) 「言語と科学」, 「国際理解教育」, 「交換留学制度を通じた教育的戦略」, 「社会発展に寄与する言語教育の役割：認知科学を通じた ESP の効果的指導法」といったテーマに基づく、同国の高等教育機関や学術協会 (Argedava European Cultural Association, UNESCO など) からの招待講演会。2014 年 2 月には同国 UNESCO 本部での招待講演会も実施した。詳しくは近畿大学法学部 HP (アクセス日：2014 年 5 月 23 日) を参照。
- 4) もちろん、同作品で用いられている英語表現の中には、従来の学習事項に活用することができるものも数多く存在している。数例ではあるが、以下にその実践場面例を挙げておく。
[1] 動名詞句による過去事象表示：Haku: They don't even *remember being* humans. <00:48:08>

- [2] 「完了」の意を表示する [be 動詞 + 往来発着動詞の過去分詞形] :
- ・ Chihiro: I thought they *were gone*. <00:48:34>
 - ・ Chihiro: Are you hurt? Those paper birds *are gone*. You're safe now. <01:04:42>
 - ・ Zeniba: What's this? The spell *is gone*. <01:48:43>
- [3] 反語表現 : Yubaba: *Why should I hire you?* <00:37:46>
- [4] 使役動詞 (make, get, let がそれぞれ「強制」, 「一定の苦労を伴う使役」, 「許可」を表す場合) :
- ・ Lin: They say Yubaba *makes* him do bad stuff. <01:06:58>
 - ・ Big baby: You came here to *make* me sick. <01:20:51>
 - ・ Chihiro: Thank you. He's *got* a thorn stuck in him. <01:02:54>
 - ・ Yubaba: Hustle now, and *get* the women to help them. <01:03:33>
 - ・ Chihiro: Ouch, let go! Oh, thank you for helping me. But I'm in a hurry. Please *let* me go. <01:20:43>
 - ・ A bathhouse worker: Move, move. *Let* our guest through. <01:15:15>
- [5] 「過去の習慣」を表す used to (同意味用法の would との対比に基づく)
- ・ Kamaji: Make sure you get it right. There *used to* be a return train, *but these days it's a way ride*. Still interested? <01:30:45>
 - ・ Kamaji: Haku turned up one day before just like you. Said he wanted to learn magic. I didn't approve... becoming a sorcerer's apprentice... I warned him, but he *wouldn't* listen. Said he had nowhere left to go. Signed up to be Yubaba's apprentice. As time goes by, he turned increasingly pale and his eyes took on a sharp gleam. <01:28:27>
- [6] 客観的理由に基づく have to の語用 :
- ・ Chihiro: I really *have to* go home, granny. Haku could die while I'm just sitting here... <01:50:43>
- [7] 仮定法 : Zeniba: OK, boys, *time you went home*. Come again soon. <01:52:09>
- [8] 類義語の概念的相違 (以下は silent / silence と quiet, get up と wake up について) :
- ・ Haku: Quiet! <00:15:49>
- [※ Yubaba が鳥になって見回っているのを Haku が見つけて Chihiro に注意を促す場面]
- ・ A bathhouse worker (small frog): But, Sen did save us, after all. <01:42:06>
 - ・ Yubaba: *Silence!* She started it all and she's run away.
 - ・ Haku: (座り込む Chihiro に対して) *Get up!* <00:16:27>
 - ・ Haku: Chihiro kept me calling my name in the darkness. I followed her voice and *woke up lying here*... <01:41:39>
- 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体筆者)
- また, 上記 [4] の get が「一定の苦労を伴う」概念を包含することは, 次の [9] の場面を挙げることにより, その関連性への理解をさらに深めることにつながると考えられる。
- [9] Lin: Someday, I swear I *get to* that town. I'm gonna get out of here. <01:07:36>
- 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体筆者)
- なお, 悪臭を放つ Stink God を迎えなければならない下記 [10] の場面などはその日本語訳を学習者に創作させ, 実際の日本語字幕と比較・対照させることにより, 学習者のさらなる興味を引き出す一方策となり得る。
- [10] Yubaba: Welggum to our buzzs... 「ヨク, オコヒクダサヒマヒタ…」 <00:59:12>
- Yubaba: Oh... Money... Sen, hurry, take it! 「ア…オカネ…セン, セン, ハヤクオウケトリ

ナ]

Sen: Yes, ma'am. 「ハ, ハイ」

Yubaba: Zhou him de bazz. 「ナニシテルンダイ, ハヤクゴアンナイシナ」

Sen: Pl... Pleazze. 「ド…ドウゾ」

— 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体筆者)

- 5) なお, 映画を言語文化教育に導入する意義について詳しくは上野・森山 (2013) 参照。
- 6) 同 DVD (国内生産版) では, 外国語ではフランス語による吹き替え, および, フランス語, 英語による字幕切り替えが可能となっている。したがって, 各場面の状況設定は日本語による理解が進めることが前提となる一方, 当該英語表現については英語字幕を活用することになる。なお, 同 DVD の輸入版は英語吹き替えも可能であるが, 日本の学習者にとって手に入りやすい国内生産版の活用を優先し, 論を進める。
- 7) このような関係は他の多くの表現にも当てはまる。たとえば, receive を単に「受け取る」とだけすると, *Receive the money. / *I went there in order to receive the money. がいずれも誤文であることに妥当的説明を与える指導ができない。Receive は「意志をもって行う」行為ではなく, そうした行為が前提条件である命令文や目的を示す in order to とは共起しないのはごく自然なことである (※ accept は「意志をもって受け取る」)。このような語彙概念の獲得は, I received an invitation to the party but didn't accept it. (パーティーの招待状が届いたがそれを受けなかった) といった実例を提示することにより, さらなる学習効果が期待される。
- 8) Come と go の直自性に基づく抽象的移動, つまり「状態変化」表示への転化プロセスについて, 詳しくは上野・森山・福森・李 (2006: 4-5) 参照。なお, その転化プロセスを通した「出現」および「(独立した) 存在」概念表示の come については, それぞれ, たとえば以下 [1] - [2] の場面などが活用対象となる。

[1] Yubaba: Come out, please! <01:43:53>

[2] Chihiro: It's in so deep, it won't come out! <01:02:56>

— 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体筆者)

- 9) 〈 〉内の数字は, それぞれ, 映画内で当該台詞が生起する「時間・分・秒」を示している。以下同様。
- 10) 言うまでもなく, 当該日本語字幕に対する英語訳は何も映画内で使用されている表現ばかりではない。このことを学習者に事前説明した上での学習方法となる。以下同様。
- 11) この Yubaba の台詞自体は 2.2.3 における実践場面例としても活用可能。
- 12) 英語字幕では () で記した be 動詞は省略されている。
- 13) 英語字幕では () で記した be 動詞は省略されている。
- 14) 「言語学」, 「社会学」, 「人類学」, 「教育学」, 「心理学」といった学際的観点から観察した計 47 種の英語前置詞 (句) 各々の多義性のメカニズム, および, 各前置詞の中核コンセプトが計 41 種の英語接頭辞に継承される体系について, 詳しくは森山智浩・高橋・福森・田保・藤原・Nommensen・入学・森山オアナ (2010) 参照。
- 15) 同書の教授資料書 (Teacher's manual) では, 本論 2.2.7(1) - (3) に対する試案としてそれぞれ, 以下 [1] - [3] のように記されている。

[1] He saved my life.

[2] Very young children often put their shoes on the wrong feet.

[3] Most people can give the right answer when they are asked

{ where Lincoln stands in the order of the American presidents }, and everybody
{ how many presidents there were before Lincoln }

{ probably knows } the number of George Washington's presidency. But only those who know
{ may know }

American history very well can answer the question: “Who was the second [president]?”

なお、筆者たちの経験上、本論 2.2.7(3) および上記 [3] について、和英辞典でしばしば見かける次の三例、In what number of the order of presidents is Lincoln? / What is Lincoln’s presidential number? / What is Lincoln’s ordinal as American President? における容認度には首を横にふる英米人が多い。また、別の例 Where does the name of Lincoln stand in the list of American Presidents? は正しい英文であるが、Lincoln の偉大さ (greatness) を問う文で、in the list of succession of American Presidents に変えれば「何代目」の意味がでてくるという。

- 16) もちろん、同作品で用いられている英語表現の中には、認知言語学以外の言語学分野における諸知見を学ぶことができる実践場面も数多く存在する。数例ではあるが、以下にその実例を挙げておく。
- [1] 他動詞移動構文：Lin: Don’t *call him over*. <01:36:35>
 [2] 軽動詞構文：Zeniba: *Have a seat*. I’ll make you some tea. <01:48:08>
 [3] 意味変化：Chihiro: I’m here to apologize *for* Haku. <01:48:33>
 ※「交換→受益者」の転化過程]
 [4] 他動性：Zeniba: *Keep at it*. <01:50:20>
 ※こうした他動性について、認知言語学の観点からは CLOSENESS IS STRENGTH OF EFFECT (cf. Lakoff and Johnson (1980: 128)) というメタファー的観点から説明される]
 — 映画『千と千尋の神隠し』(2001) (イタリック体・注釈筆者)
- 17) 1985 年から 30 年前の世界にマーティがタイムトラベルし、1955 年の若かりし日のドクにタイム・マシンの修理を頼む場面。
- 18) さらに詳しくは、Moriyama (forthcoming (2014b)) 参照。
- 19) 不定冠詞との共起関係から、絶対神を持たない日本のアニミズムを見つめる学習機会ともなる。
- 20) “In the name of the Father, Son, and Holy Spirit...” といったキリスト教信仰の祈りに基づく。
- 21) つまり、「感情」は「上」方向に存在することから、たとえば水中で喩えると「浮く+流される」ことになる。
- 22) 「上」方向と「閉鎖」および「出現」との概念的関係について詳しくは上野 (2000) 参照。
- 23) 本稿では、紙面の都合上、2011 年度前期・後期分のアンケート結果のみを掲載したが、それ以外の期間についても、同様の成果が得られている (延べ、300 人以上が対象)。詳しくは、近畿大学中央図書館で公開されている森山智浩担当講座のアンケート結果およびリフレクション・ペーパーを参照。
- 24) 同評価結果について詳しくは近畿大学法学部事務室にて公開されているアンケート結果、もしくは、近畿大学法学部 HP (アクセス日: 2012 年 8 月 23 日) 参照。

〈Bibliography〉

(注: 本シリーズの「異言語教育と言語文化」(その 1-その 4) に記載されなかった文献で、本稿で初めて参照されたものを以下に記す。)

- Moriyama, T. (2012) “Language-Culture Education for Developing the International Bridge between Romania and Japan — from a Didactic Perspective upon Cognitive Linguistics —,” in Argedava Cultural Association ed. *Omul și Societatea* (Anul III, Nr. 4) (*Man and Society*, the Third Year of the International Scientific Project, No. 4), pp. 21–31. Argedava European Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim. Râmnicu Vâlcea.
- Moriyama, T. (2014a) “A Pedagogic Approach to the Innovation of Global Studies’ System at the International Course and the English Seminar of Kinki University — along with the UNESCO’s Recommendation Concerning International Education —,” in Argedava Cultural Association ed.

- Omul și Societatea* (Anul IV, Nr. 6) (*Man and Society*, the Fourth Year of the International Scientific Project, No. 6), Argedava European Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim. Râmnicu Vâlcea.
- Moriyama, T. (forthcoming (2014b)) “A Cognitive Linguistic Study of English Education — through the Studio-Ghibli’s Animated Film *Spirited Away* —,” in *Journal of Universitatea Stefan cel Mare Suceava*. Suceava.
- 浅野俊和 (2003) 「〈破綻〉の美学 — アニメーション映画『千と千尋の神隠し』の物語構造分析」『児童文学論叢』(第9巻)(pp. 1-12). 日本児童文学学会中部支部.
- 上野義和 (1993) 『大学実用英作文』. 英宝社. 東京.
- 上野義和 (2000) 「視覚行為と概念化」*SELL* (第17号)(pp. 1-17). 京都外国語大学. 京都.
- 上野義和・森山智浩 (2013) 「異言語教育と言語文化 (その6) — 認知言語学的視座における映画映像の活用とシェイクスピア・プロダクション —」『研究論叢』(第81号)(pp. 1-21). 京都外国語大学国際言語平和研究所. 京都.
- 上野義和・森山智浩・福森雅史・李潤玉 (2006) 『英語教師のための効果的語彙指導法 — 認知言語学的アプローチ』. 英宝社. 東京.
- 河合靖 (1999) 「21世紀多文化社会の外国語学習」『外国語教育の意義と未来』(pp. 61-98). 北海道大学言語文化部. 北海道.
- 木部則雄 (2003) 「『千と千尋の神隠し』 — 精神分析的考察」『お茶の水女子大学発達臨床心理学紀要』(第5巻)(pp. 1-12). お茶の水女子大学発達臨床心理相談室.
- 倉田誠 (編) (2011) 『映画で学ぶ英語学』. くろしお出版. 東京.
- 高木健治郎 (2007) 「なぜ、「千と千尋の神隠し」は大ヒットしたか — 文化としての「千と千尋の神隠し」」『比較生活文化研究』(第14号)(pp. 85-100). 日本比較生活文化学会.
- 高木健治郎 (2008) 「なぜ、「千と千尋の神隠し」は大ヒットしたか (2) 労働からみた「千と千尋の神隠し」」『比較生活文化研究』(第15号)(pp. 47-62). 日本比較生活文化学会.
- 寺島隆吉 (2009) 『英語教育が亡びるとき — 「英語で授業」のイデオロギー —』. 明石書店. 東京.
- 森山智浩 (2006) 『英語における語彙概念の応用研究 — 空間関係づけ範疇に関する単一語・連語表現を中心に —』. 博士論文. 京都外国語大学. 京都.
- 森山智浩・高橋紀穂・福森雅史・田保顕・藤原真名夫・Carl Nommensen・入学直哉・森山オアナ (2010) 『英語前置詞の概念 — 認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から —』(FD 語学教育改革シリーズ1). プイツーソリューション. 愛知.
- 山田健太郎 (2004) 「英語版アニメ作品に見る翻訳の問題: 『千と千尋の神隠し』の場合」『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』(第5号)(pp. 195-205). 県立長崎シーボルト大学情報学部. 長崎.
- 山本政人 (2005) 「『千と千尋の神隠し』における成長」『ジャイロス』(第10巻)(pp. 150-161). 勉誠出版. 東京.

【FilmDVDs】

- Back to the Future Part III* (『バック・トゥ・ザ・フューチャー PART3』) (1990, Universal Pictures).
- Failure to Launch* (『恋するレシピ ~理想のオトコの作り方』) (2006, Paramount Pictures).
- In Her Shoes* (『イン・ハー・シューズ』) (2005, Fox 2000 Pictures).
- Juno* (『JUNO/ジュノ』) (2007, 20th Century Fox).
- Secret of My Success, The* (『摩天楼 (ニューヨーク) はバラ色に』) (1987, Universal Pictures).
- Snow Falling on Cedars* (『ヒマラヤ杉に降る雪』) (1999, Universal Pictures).

『千と千尋の神隠し』（2001, スタジオジブリ）.

【Websites】

近畿大学法学部 HP : <http://www.kindai.ac.jp/law/staff/profile/moriyama.html>

<http://www.kindai.ac.jp/law/kyoiku/enquete/>

毎日新聞デジタル（2013年10月31日付） : <http://mantan-web.jp/2013/10/31/>

[20131030dog00m200046000c.html](http://mantan-web.jp/2013/10/31/20131030dog00m200046000c.html)